

## 令和5年度弘前市立郷土文学館運営委員会 会議録（第1回）

日時	令和5年11月1日（水）14時00分～15時00分		
場所	弘前図書館2階 会議室	傍聴者	0人
出席者 (敬称略)	委員長 藤田 晴央 委員 浅瀬石 久仁子 委員 宮崎 新 委員 帆苺 基生 委員 桶田 久美子 委員 鈴木 溪心 委員 今谷 弘		
欠席者 (敬称略)	副委員長 井上 諭一		
事務局側 出席者	郷土文学館館長 黒滝 雅信 郷土文学館企画研究専門員 櫛引 洋一 弘前市教育委員会生涯学習課長 原 直美 図書館・郷土文学館運営推進室長 山田 俊一 図書館・郷土文学館運営推進室主査 黒崎 みお		
配布資料			
資料1 弘前市立郷土文学館運営委員会の趣旨及び役割等について 資料2 指定管理者について 資料3 郷土文学館観覧者数の推移 資料4 郷土文学館所蔵資料・種類別数量 資料5 過去事業実施状況 資料6 令和5年度各事業内容 参考 弘前市立郷土文学館条例 弘前市立郷土文学館管理運営規則			

次 第	
1 開会 2 委嘱状交付 3 教育長あいさつ 4 組織会（委員長、副委員長の決定） 5 事務局員紹介 6 郷土文学館館長あいさつ 7 議事 （1）郷土文学館運営委員会の趣旨及び役割等について （2）指定管理者について （3）弘前市立郷土文学館利用状況等について （4）令和5年度弘前市立郷土文学館事業実施状況について （5）今後の事業等について 8 事務連絡 9 閉会	
会議内容（概要）	
教育長	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 10px;">開会</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 10px;">委嘱状交付</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 10px;">教育長あいさつ</div> <p>郷土文学館は、平成2年7月に、弘前市の市政100周年を記念して開館し、市民の文学や郷土に対する興味・関心を高めるため、郷土出身の作家や弘前市にゆかりのある作家に関する資料の収集・研究及び展示を行っている。年間を通して開催している企画展は、多くの方々が優れた文学作品に触れる機会となっている。さらに、地域の中での文化的な活動の一端を担う取り組みとして、「北の文脈文学講座」や「ラウンジのひととき」など、鑑賞にとどまらない様々なイベントを企画し開催してきたところである。しかしながら、新型コロナウイルス感染症への対応が始まってからは、休館やイベントの縮小を余儀なくされ、昨年度後半になって、ようやく少しずつではあるが、コロナ禍前に戻りつつあるといえる。教育委員会として、図書館と一体になった知の拠点をつくるためにも、誰もが様々な形で郷土の文学を楽しむことができるよう、郷土文学館の更なる充実を図っていきたいと考えている。</p>

	<p><b>組織会（委員長・副委員長の選出）</b>  藤田委員を委員長にとの推薦があり、全会一致で決定。  副委員長の自他薦なしのため、井上委員を副委員長にとの事務局提案があり、全会一致で決定。</p> <p><b>事務局員紹介</b></p> <p><b>郷土文学館館長あいさつ</b>  昨年4月から郷土文学館館長及び図書館館長に就任している。  郷土文学館は指定管理がスタートして7年目となり、学びとあそびの創造の場、知の拠点として、地域とつながる郷土文学館、図書館を目指して、図書館流通センター、アップルウェブ、そして弘前ペンクラブの3社の共同事業体が、力を合わせて引き続き運営を続けてまいりたいと思っている。皆さまのご指導方々よろしくお願ひしたい。</p> <p><b>議事（1）郷土文学館運営委員会の趣旨及び役割等について</b>  事務局（資料1に基づき説明）  委員（質疑なし）</p> <p><b>議事（2）指定管理者について</b>  事務局（資料2に基づき説明）  委員（質疑なし）</p> <p><b>議事（3）弘前市立郷土文学館利用状況等について</b>  事務局（資料3、資料4、資料5に基づき説明）  委員（質疑なし）</p> <p><b>議事（4）令和5年度弘前市立郷土文学館事業実施状況について</b>  事務局（資料6に基づき説明）</p>
館長	
事務局	
委員	
事務局	
委員	
事務局	
委員	
事務局	

常設展示以外に毎年テーマを決め、展示期間が1年のものが企画展となっている。今年度は、第47回の企画展であり「小説「花はくれない」―佐藤愛子が描いた父・紅緑―」を4月から来年の3月21日まで開催している。佐藤紅緑は弘前市出身の作家であり、その文業を娘の佐藤愛子が書いた「花はくれない 小説 佐藤紅緑」の文章でたどり、紹介している。夏には比較的大きな会場で県外から著名な方を招いて、企画展に関連した記念講演を行っており、今年は8月19日に、慶應義塾大学教授の小倉孝誠先生にフランス文学と紅緑の関係についての講話を行っていただいた。

スポット企画展では、春夏秋冬、四季折々のテーマを決めて、コンパクトな展示を行っている。春は「生誕100年 佐藤愛子展」、夏は「マンガ陸羯南 原画展」、秋は「生誕120年サトウハチロー展」、冬には「新収蔵資料展」となっているが、今のところ、弘前市出身の直木賞作家である長部日出雄の原稿等の寄贈があったことから、そのお披露目を考えている。3月から次年度の4月のはじめにかけては「現在活躍中の作家展」ということで、ルポライターの鎌田慧、文芸評論家の三浦雅士ら、現在活躍中の作家について紹介する。

講座については、「北の文脈文学講座」を5月から12月までの第3土曜日、午後2時から2階のラウンジで行っており、こちらはどちらかというと文学愛好家向きのもので、指定管理になる前から行われていたものである。

「ラウンジのひととき」は、第1土曜日の午後2時から1時間ほどで行われ、こちらは指定管理になってからの平成30年度から開始したものであり、「弾き語り、コンサート、ドラマリーディングなど、郷土文学と「音」のコラボによるひととき」ということで、これまで文学に縁がなかった方々も気軽に参加できる催しになっている。

ロビー展は、玄関を入ってすぐにある二つの展示ケースで、企画展やスポット企画展に関する展示を行っている。こちらでは、1年の間で随時、話題性のあるものを展示している。その中でも、特に「文学忌」というものを令和2年から行っており、常設展示作家10名に、将来常設作家になるであろうと思われる長部日出雄を加えた11人の忌日を無料開館にして、講話や朗読などを行っている。

その他の事業としては、博物館実習や社会教育実習などで、主に弘前学院大学の学生の実習を受け入れ、文学に興味を持ってもらっている。

委員	<p>また、外部での出前講座の実施、アップルウェブで毎週土曜日の1時50分から2時まで、企画展に関連した作品を朗読する「ラジオ文学館」というものを広報として実施している。</p> <p>(質疑なし)</p>
事務局	<p><b>議事(5) 今後の事業等について</b></p> <p>今後の事業については、来年の4月から開始することから、すでにテーマ等を決めて準備中である。</p> <p>主なものとして、企画展は「文学と温泉」をテーマとしたものを考えている。今年が佐藤紅緑、去年は一戸謙三、一昨年は成田千空と、人物が続いていたところだが、以前の運営委員会において、「人物はもちろん中心となるが、もっと別なテーマを決め、県内外の著名人の作品を展示するようなものもあってもよいのではないか」との委員からの意見があったころから、岩木山を描いた県内外の文人をテーマとした「岩木山と文学」という企画展を開催したことがある。今回は、その「岩木山」の部分を「温泉」に変えて展示をしたいと考えている。</p> <p>たとえば、田山花袋や歌人の若山牧水、俳人の河東碧梧桐など、多くの人々が県内の温泉を訪れている。また、石坂洋次郎には、温泉についての著作も多くあり、そういったものを中心に、文学を通して温泉の魅力を周知するという、やわらかめのテーマで来年度は実施していこうと考えている。</p> <p>スポット企画展やその他の展示等についても、没後何年もしくは生誕何年、あるいは昨年ご逝去された方など、そういったものの中からテーマを決めるということで準備中である。文学講座やラウンジのひとつときも、それらに関連したテーマに則して行えるように準備中である。</p>
委員	<p><b>質疑「スポット企画展のテーマについて」</b></p> <p>スポット企画展では、たとえば阿部次男さんの展示をしてほしいといった要望は可能か。</p>
事務局	<p>今後、長期的な計画の中で阿部次男氏も候補にある。展示の時期としては、たとえば、阿部次男氏であれば、「津軽太平記」といった著作がある</p>

	<p>ことから、弘前城の石垣修理が完成する時など、タイミングを見定め、最も適した時期に開催するという考えている。</p>
委員	<p>了承。</p>
	<p><b>質疑「企画展の内容について」</b></p>
委員	<p>予定しているテーマの「温泉」のエリアは、どの程度のエリアを考えているのか。</p> <p>また、説明では、展示を検討している人物に、比較的昔の作家や歌人が並んだが、現代文学の人物はどうか。</p>
事務局	<p>やはり弘前市にある弘前市立郷土文学館であるため、「温泉」のエリアとしては津軽を中心とする予定だが、県南や下北など、県内には多くの温泉があることから、津軽を中心としつつ、県内全般を概観するような展示を考えている。</p> <p>また、説明では、たとえとして著名な人物を挙げたが、現代の人物についても、どのあたりまでを現代とするかも踏まえ、展示について検討しているところである。</p>
委員	<p><b>意見①</b></p> <p>音楽と文学を結び付ける「ラウンジのひととき」や陸羯南のマンガは大変好評であり、そのような企画等があるということを聞いて、県外から弘前市立郷土文学館を訪れたいという方も多くいる。特に、太宰治のファンの方々は、近年では、弘前市を訪れたら弘前大学とこの郷土文学館とまなびの家には、必ず来たいという話を耳にしている。全国的にも非常に発信力のある企画をしていると感じている。</p> <p>来年度の温泉の企画は非常に素晴らしい。温泉ソムリエがいる地域もあることから、たとえば企画展が終了したら、各温泉に展示パネルや資料を貸し出し、温泉に来る人に目にしてもらうことで、知らず知らずのうちに文学に親しめるものになるのではないかと感じたところである。</p>
委員	<p><b>意見②</b></p> <p>郷土文学館というものを弘前市として持っているという、素晴らしさを感じている。「津軽」というものには文学を生み出すという素地があり、</p>

	<p>行政でこのような施設を作り、運営して、大事にしている。文学のファンの方はもちろんとして、地元として応援している方も大変多い、非常に裾野の広い施設であると思っている。この文化を残していかなければならない、強く感じているところである。この弘前が文学の街だということを発信できるようなことができれば良いと考えている。</p>
委員	<p><b>意見③</b></p> <p>学生に郷土文学館を紹介した際、弘前市出身の学生であっても知らなかった文人について知り、みな驚きを持って関心を持ち、中には、弘前や青森ゆかりの作家を卒論のテーマにという学生も出てきたりしている。企画展は、地元の作家や、そのほかいろいろなものにスポットをあて、豊富な資料を展示しており、巨大な施設ではないが、じっくり見ていると、あっという間に時間が経ち、充実した時間を過ごせていると感じる。ただ、学生にとって、大学と郷土文学館までの距離が離れていたり、直通のバスがなかったりということで、なかなか文学館に来るという機会がないようである。何かしら機会を得て紹介したり、また、講義の中で学生をこの郷土文学館に繋げたりと、学生が津軽や弘前の文学に関心を持てるような機会を作っていきたいと考えている。</p>
委員	<p><b>意見④</b></p> <p>この郷土文学館の資料収集はアーカイブとして、後世にまで伝えていくという大事な役割を担っていると考えている。重要な資料が県外に流出することを防ぐよう、地元の人材育成という面から、今の中高生のうちから伝えていきたいと常々感じている。</p>
委員	<p><b>意見⑤</b></p> <p>文学館の展示は動画を使うなど、学生にとっても、見ていてとても楽しめるものだと思う。自分の周囲では、このような郷土の資料に触れる機会が少ないと感じているところであるため、同世代の人たちに少しでも触れる機会を与えることができると考えている。</p>
委員	<p><b>意見⑥</b></p> <p>市内で、中学生が歩いているが誰も郷土文学館に向かうことがなく、寂しい印象を受けた。彼らを引き寄せる方法はないのかと思料し、たとえ</p>

<p>委員</p>	<p>ば、マンガや桜ミク等とコラボすれば可能ではないかと思いを巡らせていた。また、阿部次男さんの著作には忍者ものなどもあるため、弘前の忍者と連携して何か企画ができるのではないかと考えたところである。昔の作家の展示だけではなく、新しい試みが必要だと感じる。</p> <p><u>意見⑦</u></p> <p>来年度の「温泉」という企画展のテーマは、とても良い。一人の作家に限定すると、それだけの世界に陥りがちだが、このようなテーマの立て方をとると、広がりをもてる。たとえば、「りんごと文学」、「鉄道と文学」、「津軽平野と文学」、「津軽の食と文学」、もしくは、恋愛や夫婦愛をテーマに「津軽を舞台にした愛情の文学」などといったテーマの立て方をすると、地元の作家だけではなく、その端緒から、さらに豊かな企画展ができるのではないかと感じる。弘前駅を降りた観光客が郷土文学館へ足を運んでくれるような、施設となることを願う。</p> <p>また、常設展について、郷土文学館が開館して以降、ほとんど固定化されており、これを洗い直すということも、時の流れの中で成していくべきではないかと感じる。たとえば、現在の書籍文化の中で、児童書というものだけ、依然として売れ続けている。このため、児童文学をもう少し重視してはどうか。その土台となる中で、弘前で中学校（現・弘前高等学校）を過ごした秋田雨雀を常設展の中に入れ、その流れで企画展をその年に行うというものはどうか。ラウンジで絵本の読み聞かせ等も開催できるのではないかと感じている。</p> <p>閲覧室の設備では、視聴覚の部門が旧態依然として感じている。ビデオ展示のための視聴用椅子は背もたれがなく、数人分しかない。文学館の観覧者の多くは高齢者であることから、視聴時間が二十数分となると疲れを感じてしまう。このような部分で配慮を検討してもらいたい。たとえば、方言詩コーナーとビデオ展示の場所を入れ替えしてみたり、方言詩コーナーのガラス張りの部分を一度無くしてみたりという機能的な面での洗い直しということも、検討課題としてはいいのではないかと感じている。</p> <p>「ラウンジのひととき」や「北の文脈文学講座」も多様なものがあり、とても良いと思うが、さらにその時々企画展に拘らずに、弘前市を中心とした文学活動、表現活動をしている方を招き入れ、その活動をしてもらうことで、若い世代にもっと関心を持ってもらうことができるので</p>
-----------	---

はないかと考えている。すべて、この郷土文学館がこれからも魅力ある文学館になっていくことを願う思いから考えている。

事務連絡

閉会